平成２８年度　第２回青少年問題協議会記録

１　日時　　平成２９年１月３１日（火）　９：３０～１１：００

２　場所　　研修室１～３　（市教育総合センター３階）

３　出席者

（委員　２０名）

武隈委員、西原委員、松田委員、中田委員、川崎委員、大脇委員、手嶋委員、坂尾委員、海江田委員、神戸委員、柿原委員、折田委員、川島委員、瀧川委員、黒木委員、杉元委員、坂元委員、古江委員、兒玉委員、谷口委員

（幹事　８名）

戸床幹事、大野幹事、伊瀬知幹事、井手上幹事、山下幹事、春田幹事
大堂幹事、山下幹事

４　会順

（１）開会のあいさつ
（２）第１回青少年問題協議会会議報告
（３）協議
　①　平成２８年度青少年問題協議会の会議経過報告
　②　平成２８年度青少年健全育成事業等の実施状況
　③　平成２８年度青少年問題協議会専門委員会の報告（専門委員会委員長）
　④　平成２９年度青少年問題協議会会議計画（案）
　⑤　その他（情報交換）
（４）閉会のあいさつ

５　協議内容

①　平成２８年度青少年問題協議会の会議経過報告

（事務局）

資料に基づき、説明。

②　平成２８年度青少年健全育成事業等の実施状況

（事務局）

資料に基づき、説明。

（委員）

「新成人の集い」では、青少年課の先生方を中心として、企画から運営まで非常にしっかりとなされていたことを感じ、感謝している次第です。新成人のつどいでは、例年になく、前の方からきちんと座り、来賓の方のお言葉を傾聴していたということ、後で市長も感心していたと後でお聞きしまして、私も後ろから拝見していて、鹿児島市の若者たちの未来は明るいのではないかと感じました。そう感じたのは、やはり青

少年課の先生方と、鹿児島市の中高校生がしっかりやってくれていた成果であると感じました。

実行委員長の大学の学生でしたが、彼女はその後の「さつまっ子」の方でも実践発表をしていて、その前からも彼女はずっといろんな立場で頑張ってきてくれていた彼女だったので、単なる実行委員長ではなくて、日頃の生活態度が表れているのだと思いました。そういう子達が増えていって、小中学生がちょっと上の学年を見る機会を増えるようないわゆる縦割りの異年齢集団の教育ができたらいいなと感じることでした。

一方で、多くの校区では、「立志のつどい」で中２の学年が対象となってあるわけですが、小学校６年生の時には、きちんと整然とした卒業式を終えたはずですが、２年も経つと、ざわついた感じになって、２年でこんなに変わるのかなと思うくらいになっていました。雑然とした集まりとなっていました。会の始まる前に話をしたのですけれど、古来から、節目、節目の式典というものをその意味を含めて、我々を含めて、きちんと感じ取るものになっていくようにしないといけないと思ったときに、この青少年課がやっているいろんな行事が、子どもたちに伝わっていけばよいのかなと思いました。今も先生達のおかげで伝わっているんですけれど、さらに私たち大人の関わりも深めていければと思いました。

（委員）

「成人のつどい」の実行委員長は、もともとコアラというボランティア活動に中学校時代からいそしんでおり、大学生ですけれども経験豊かな、彼女のもとに、様々な学生たちが集まって、回を重ねる度に、「自分たちで創り上げるんだ」という意識が高まってきており、そういう姿が集まってきてくださった新成人の方々にも伝わったのかなと思っているところです。また、お手元にあります「心の言の葉」は、学校教育課でやってもらっている１４年間を経る事業ですけれども、保護者や子どもたちに言葉であったり、文字であったり、あるいは活動であったり、要は、私どもとしましては、いろんな形で青少年のまさしく心に届く術を取り組んでいるところでございます。委員の皆様から、それに伴う課題等を出して頂くことで、それぞれの事業等を見直していく機会となると考えております。忌憚のない意見をお出しください。今日はよろしくお願いします。

③　平成２８年度青少年問題協議会専門委員会の報告（専門委員会委員長）

（専門委員長）

資料に基づき、説明。

（委員長）

今回、１回目、２回目の専門委員会の報告の中での提言は、どれもやさしい言葉で説明されており、大変、よく分かりましたけれども、ここで主張されていますことはどれも重要で大変、重い内容が含まれていると思います。それぞれの立場でご意見をお願いします。

（委員）

小学校での取組。ネット世代の人間関係力として４つ挙げられておりますけれども、「関係をつくる力」、「関係を修復する力」、「助けを求める力」、「関係を調整する力」。

子どもたちの学校生活を見ていまして、子ども同士のトラブルがありますけれども、それはここにあげられている４つのことが欠けているのかなと思います。

子どもたち自身は「つながりたい」と思ってはいるものの、それがちょっかいになっている。トラブルになってしまい、うまく修復できないでいるケースもある。「ごめんね」と言えなかったり、それを見た周りの誰かがそのことに気付いて「大丈夫」ということをなかなか言えないでいたりする。やはり、そこの力が弱いんだなと感じています。

うちの学校は、児童は４５５名います。職員は３２名です。学校では、学級担任だけでその児童を見るのではなく、全体で４５５名をみていこうとしています。

毎月１回、必ず全職員で「子どもたちのことを語り合う。」としています。この学級では今、こんなことが起きている。こんな風に発展しそうだ。未然防止での取組をやっています。また、ことが起こって、今、このようになっていますという事例検討的なこともやっています。

週１回は、学年会の中で、それぞれの学級で今、どんなことが起きているのかを話し合っています。小学校は、学級担任制のため、ややもすると、「隣の学級で起こっていることが見えにくい」といいうことがありますが、低学年は学級担任のみですが、高学年は理科専科であったり、家庭科であったりと学級担任以外の職員が指導することがありますし、学校には、司書補や学校主事がいます。

いろんな立場がおりますが、それぞれの立場で、子どもたちのことでちょっと気になるなと気付いたことを出しましょうよ。と言っております。学年会で「コミュニティー〇〇」という時間を設定して、情報交換しております。職員同士のつながりもないとうまくいかないので、学年の中、高学年部、専科の学級担任がかかわって子どもを見ていきましょうという取組を進めています。

それと「いじめ防止強調啓発月間」では、全員でいじめの標語を作成しています。大きな取組はしていませんが、子どもたちの毎日の生活を見つめて、情報交換をしながら、いい方向へもっていきましょうということをやっています。子どもと学校だけでは解決しないこともありますので、保護者や関係機関と連携しあって、この子をどんな風にしていきましょうかということをやっています。

（委員）

携帯電話の所持率もあがってきています。問題もあがってくるんですが、学校としましては、インターネットの利用上の注意点をネットポリスだったり、県警のサーバー対策室の方をお呼びして、情報セキュリティに対する講演会を実施して、知識を教えております。本校では、入学前の保護者に、学校案内をするときに、中学校では、携帯電話は必要はありませんよという話を１５分から２０分させていただいています。部活では携帯電話は連絡などで必要ですよといった間違った情報が流れていたりするものですから、学校では必要ありませんとの話をします。

授業でスマホを使うことはありません。授業ではＩＣＴを使って対応していきますので、いろんな授業でやっています。携帯電話は不必要ですよという話をしています。人間関係がまだできていない中学生の段階で、スマホなんかでやりとりをしてこじらせていくよりは、もたせないでください。保護者がもたせるならば、いろいろな利用条件を出してやっていけばいいのではないでしょうかと伝えています。

ですから、私のところにまであがってくるようなスマホのいじめですとかはあがってきていません。

ただ、嫌がらせ的に、先生が写真に２ｃｈにあがっていたということがありました。それは、たぶん、保護者ではないかなということもありました。ネット依存の保護者も多いようなので、そういう研修も家庭教育学級等でやっています。しかし、保護者の意識がなかなか統一されないということがあります。

（委員）

携帯電話の所持率は９０％以上の所持率です。フィルタリングの設定やネットの功罪については、直接、合格者集合等でも保護者を含めて話をしているところです。

先日、中学校入学の選抜入試が行われました。試験では、「携帯電話は持ち込まないように」としてあったのですが、中には、保護者が弁当を忘れたということの連絡が子どもの携帯電話に入ったということがありました。

青少年問題となりますと、いろんな活動をして、「よい面」を刺激を与えていきたいと考えております。また先程来、話題となって実行委員長は、本校の中・高の卒業生でもありますが、その弟も彼も生徒会長を経験しました。そういったことを考えますと、家庭での環境も含めて、本人達がいろんなことの中で努力している部分があるのかなと考えております。そういったことを考えますと学校は学校で、いろんな場面でいいことをやっていることを紹介していく必要があると思います。専門委員会でも出されてありますが、親の褒める場面をもっと増やして行く必要があると考えます。子どもたちのいろんな面に気付いていけるようにしていきたいです。

（委員）

専門委員会の委員として参加しました。ネットで問題となっているのは、その一つのツールであって、その根底となっているのは、「親子のコミュニケーションの問題」であると思います。「家庭教育力の低下」に問題があると思います。

資料の１４ページに「あいさつ」があります。実は、今日も通学路に立って、あいさつをしてきたところでございます。これは、義務でやっているわけではなくて、子どもたちと毎日あいさつをすることが楽しいのでそうやっているところです。中には、あからさまに無視をしていく子がいます。そういう子を見ても全く腹が立ちません。むしろ、この子の親はどういう声かけをしているのかなと心配になります。中には、最初は、全然、あいさつをしなかったのに、あいさつができるようになったなという子もいます。今朝もありました。今まで全くあいさつをしなかった子が、恥ずかしながら、私の前を通りながら、頭をちょこっと下げた子がいました。初めてでした。やはり、そういう子に声を掛ける。あいさつが返ってこなくても、あいさつをし続ける。これが非常に大切であると私は思う。特に家庭においても。中学校の娘がいますけれども、朝、名前を呼んであいさつをしても絶対返ってこない。高校生の息子は名前を呼んであいさつをすると返ってくる。これを私が外であいさつをしなくなると、子どもはどういう風に受け取るかというと、「えっ？私のこと、無視しているの。」と受け取る。

どこの家庭でも同じ。家庭でのあいさつは大事です。中学校になってあいさつをしない子はたくさんいます。だけど、大人があいさつをしないと、子ども達は「自分のことを無視している」と捉えるんですよという話をよくしている。

反抗期がある。娘も反抗期です。娘が毎日のように私に言う言葉は３つある。「ウザイ。キモイ。キタナイ。」です。やはり、子どもの世界の中で、いろんなことがあって家庭に帰ってくる。子どもの世界でもまれて帰ってきて、ストレスを発散する場が家庭にあることが大事。娘の場合は、「ウザイ」という言葉を私に言うことで、ストレスを発散しているのではないか。私がストレス発散の捌け口になっている。反抗期は決して悪いものじゃない。家の中で、嫌なことをいうというのは、家の中にそういう雰囲気がある。なので、親は一回、一回、腹を立てるのではなく、この子はこの家庭の中に、こういう自分を出す場がある。そういう風に受け取ってもらえれば、子育てにも余裕をもってできる。

「心の言の葉」ですが、家庭教育充実研修会をした時に、その中で、一番最後にプロジェクターでＢＧＭと共に流しましたところ、たくさんの方の涙を誘ってしまいました。それぐらい、すばらしい作品が入っています。いろんな研修会でも使えるものだと思います。

（委員）

私も子どもたちの顔を知ることが大事だと思い、毎朝、立ちました。やはり、あいさつをする子としない子が両極化していると思います。またする子の中でもその仕方が違う子どもたちがいました。ある子は、終業式に、「今年、一年ありがとうございました。」という子どももいました。また、その子は、３学期始まる際には「今年もよろしくお願いします。」というんです。そういう子は何人かいました。その子らは、やはりご家庭の影響もあると思います。

また、小学校６年生で担任の先生が言われていましたが、「立ち止まってあいさつ」を指導していると、そういう子どもたちと出会いますと私も、大変、うれしいです。義務感から最初はやっているのかもしれませんが、やがてそれは習慣化していくと思うんです。やがて、それは、中高生になってひいては社会人になって身についくと思います。

（委員）

放課後子ども教室と関わっておりまして、その感動を保護者と共有する機会がありました。たまたまアンケートを集計して、感じたことが、大方の子どもたちが「私が予想したよりもはるかに異年齢の友達ができたことに非常に喜びを感じているということでした。」１年生も入ってくると、にぎやかになっていて、私はどうしようかとも思ったんですが、２年生以上の子どもたちは、低学年の子どもたちの世話をするのが楽しいと言ってくれたりしています。

ある５年生の男の子でもっとしっかりしてほしい子どもがいたんですが、１年生が初めて自宅に帰るときに、夕方５時に、「誰か送ってくれ人いないかな？」と言いますと、その子が「ぼくが送っていきます。」と言ってくれて、その後、３週続けて、送ってくれました。私たちが意外とその子の可能性を表面だけで見て、その子を判断してしまいがちで、まだまだ早計のところがあるなと感じることでした。じっくりと子どもたちと付き合ってみて、その子のよさが分かってくる。子どもたちの可能性は、悪い所を見る以上に、その子どもたちのよい所を見ていくことが大事で、どの子どもがどう変化したかを見ることがとても大事であると思いました。

（委員）

人間関係をつくる力があいさつだと出てきました、私の住んでいる校区では、１月１４日にスクールゾーンにおいて、「あいさつ通り」と名付けました。新聞にも掲載されました。まだ成果は出ておりませんが、非常に地域を盛り上げて、周りにいる老人クラブ、そういう私たちが「私たちにもさせてくれ」といって声がかかりまして、第二土曜日を目安として、スクールゾーンに立って、あいさつをしていこうとする動きが出て参りました。

（委員）

２人の子どもがいます。小学校、中学校のＰＴＡ会長を務めまして、６年目のあいご会長をさせていただいております。本当に先ほどからでております中学生の反抗期。うちの息子は中学生から高校２年まで反抗期でした。その間、息子から「ボランティアばばあ」と呼ばれておりました。本当によその子のことばっかりやって、自分の子どものことは何をやっているんだと言われておりました。毎日、毎日、言葉の暴力を受けておりました。その息子が２５歳になりまして、結婚もいたしまして東京の方に住んでおります。板前として修行しているところです。その息子が２０歳になったときに、私に言った言葉は一生忘れないところです。

それは、「ボランテフィアばばあとかいろんなひどいことを言ってきたけど、お母さんが自分の好きなことをとにかく一生懸命、がむしゃらにやっていたんだよね。それが今になったら分かる。」と言ってくれました。

そういう言葉（ばばあ）と言ったことを謝ることはなかったですけど、やっぱり、成人式を迎えて、その息子は、将来、子どもを欲しいといっております。子育てをしてみて、親の気持ちが分かってくるんだと思いました。

今、私があいご会活動をしてみて、やはり家庭の教育、家庭内が大事であると感じています。家庭の中で愛情を感じられなかったり、愛情をたっぷりに感じられるかの違いが、成長の栄養になるか、栄養不足になるかだと思います。その一つ一つがあいさつだったりします。とにかく、愛情があるかどうかになると思います。でも、もしいろんな家庭がございますので、保護者が愛情不足であれば、学校だったり、地域だったりすればいいと思います。その一つのあいご会活動になると思います。私は仕事もさせてもらっていますが、逆に元気をもらうのは、あいご会活動になります。あいご会活動の理事会で親に言うのは、「とにかく親として一生懸命に生きていくこと、がむしゃらにやっていきましょう。」とその後ろ姿を他のお子さんではなく、我が子が見ているといつも言っています。

私の所のあいご会では、１１月に子ども主体の行事をやっています。これは私が会長した６年前からやっています。これは、夏休みぐらいからずっと考えた遊びを１１月にお店みたいに開くものです。地域の大人、子どもを招待するものです。子どもたちがあそびをしてくれるものです。最初は、そんな面倒くさいものをと言っていましたが、最近では、「この行事はいいね。」と言ってくれます。やはり、我が子がどれだけ活躍しているかというのを間近で見て、我が子の達成感、充実感を見ていると、それまでの大変さも苦労も吹き飛ぶんですよねと言われる。繰り返しながら、親としてどう接したらよいのかを考える機会となっている。あいご会は鹿児島市の取組でもあ

りますが、面倒くさいのだけれども、我が子をたくましく育てたいのであれば、一生懸命、そこに親としてかかわって、子どもたちに姿を見せる、これが一番、重要ではないかなと思っております。

私のように子育てが終わった後、他の子どもさんの子育てを見ていると、その親御さんをかわいく思えてしまう。だから一緒に一生懸命、がんばろうと思います。

さつまっ子の野外活動も子ども達は喜びます。本当に、今、野外活動を経験している子どもも少ないんです。毎年。毎年、楽しみにしています。やはり体験が大事。自分がやってみて、充実感を味わうことが大事。そして、してもらったこと、下学年であればしてもらったこと、それが上級生になった時に、自然にやって返せる。体験していないとこのやって返せるということは生まれないんじゃないかと思います。よりよい関係を親がＰＴＡ、あいご会等でいろんな行事を通してやっていくこと、体験させていくことで、子どもは育っていくことが大事であると思っています。

④　平成２９年度青少年問題協議会会議計画（案）→　承認

（事務局）

資料に基づき、説明。

⑤　その他（情報交換）

（委員）

中２で不登校になった子どもさんがいて、父からの虐待を受ける中で、お母さん との関係をつくりながら、学校とも連携しながら、お母さんとのコミュニケーションを高めながら、登校出来るようになったという事例がありました。

また、娘はイタリアにおりますが、日本人学校の登校下校の中で、中学生から小学生まで一緒に登校しておりますが、その中で、小学生が暴れますと、中学生が注意するという鹿児島の郷中教育のようなものがあり、そういうものは続けていってくだされば と思います。また新聞でも拝見しましたが、今回、鹿児島市では５、８２２名の新成人が誕生したところですが、その姿は、本当に将来の鹿児島市を頼もしく思うことでしたこれからは、エネルギッシュな青年だけでなく、私たちのような団塊の世代もまだ、地域や子どもたちにできることがあるのではないかと思いました。

（委員）

普段、子ども達と接する機会がありませんので、非常に勉強になったところです。先ほどのネット環境に関する話では、アメリカの大統領選挙について取り上げたサイトがあって、自分が好きな候補者のサイトばかりを見ていて、それを信じている。ネットの世界というのは、自分の知りたいことを知ることはで きるんですが、信じたいこと、本当でも嘘でも信じたい方にどんどん深めてしまいます。それと逆のことについては、見ないということが起こる。日本の国内でもそういうことは起きやすい。自分が信じたいことだけを見る。そうでない情報は見ない。では、どうすればよいかというと、一番おすすめしたいのは、「新聞」を読むことです。新聞では、なるべくそういう両方の情報を交えています。新聞は、中立ですので。もちろん、新聞によっても色々ですので、いろいろな新聞を読み比べる　ことが大事だと思います。

専門委員会の報告の中にもありますように「情報を取捨選択する必要性がある」

これは、子ども達だけでなく、大人の世界の中でも必要で、信じたいものだけを信じてしまうといろんな所に攻撃してくるとかなことだと思います。学校や大人の世界で子ども達が非常に偏ったような所を見ているようであれば、それを信じて良いの？もっと拡げてみようよというような声掛けが大事になると思います。「南日本新聞を読んでみようよ」という声掛けがいいのかなと思います。

（委員）

キャラバンカーの利用をお願いしたい。１５箇所でご利用していただきた。バスに入りますと、ゲームをしながら薬物に関することを学ぶことができる。１回で４人でゲームができます。補導員がつきまして利用できます。最後は、プリクラを撮ることができる。ぜひ、ご利用をお願いしたい。

（委員長）

貴重な意見をありがとうございました。

今回の専門委員会の２回のご提言は、重要な御指摘をいただいている。

来年度も引き続きということで、大変期待している。

「学校が地域社会やそれと関連する団体等と協働してやっていくことがさらに大事になってきている時代だと思う。

それぞれの立場で専門性や持てる力を結集することが大切になっている。

ある意味、子ども達にとって「切れ目のない保障」をしていくために、横の連携を深めていく必用があると考えております。そのためには、子ども達にとって少し上の世代。またその上の世代といった「垂直の連携」が重要になってくると思います。まさに鹿児島の持ち味である「郷中教育のよさ」を改めて考えるところです。また、専門委員会のご提言にもあります「ななめの関係」も大いに関係してくるところであり、大変重要な御指摘であると思います。

ぜひ来年度も研究していただけるということでありがたいと思います。